

論文の要旨

ふりがな 氏名	リーイー 李芸 ⑩
論文題目	日中戦争期における中国共産党根拠地の労働英雄運動 —陝甘寧辺区・晋西北根拠地・太岳根拠地の比較を中心に—
<p>論文の要旨</p> <p>中国共産党（以下、中共）はソ連のスタハノフ運動に倣って1939年に労働英雄の制度を設け、「人民生産奨励条例」によって毎年功労の顕著な者を表彰してきた。従来の研究では、大生産運動が毛沢東の提唱によるため、労働英雄運動が陝甘寧辺区から始まり、各根拠地へ広がっていったことが前提とされていた。また、労働英雄運動の展開、英雄の社会改造における役割を中心とした先行研究が多いが、各根拠地における労働英雄運動の比較の研究はほとんどない。しかし、実際には、他の根拠地も生産発展のため、1940年代から労働英雄の表彰を始めている。本研究では、各根拠地の労働英雄運動の比較を通じて労働英雄運動の全体像を明らかにしたい。中共の革命根拠地に関する研究は、各根拠地の特徴に応じた多様な革命の状況を究明してきたが、高橋伸夫が指摘するように、そのような地域の多様性が明らかになるほど、中共による革命の全体像を単一の物語として描くことが困難になっていった。中共の政権は多様な地域を一つの権力によってまとめる形で成立しており、その実態を理解するためには、多様な地域の相互作用に注目する必要があると考える。</p> <p>本研究では、陝甘寧辺区、晋西北根拠地と太岳根拠地を選択し、それぞれの労働英雄運動の経緯、特徴を検討し、その原因を分析する。陝甘寧辺区は中共中央の所在地であり、日中戦争期に日本軍の攻撃をほとんど受けず、比較的安定した地域であり、中共の政策がおおよそ順調に実施されたと思われる。晋西北根拠地は陝甘寧辺区と隣接しており、1940年に日本軍の掃蕩が頻繁に行われ、根拠地に大きな被害をもたらした。これら二つの根拠地に比べ、太岳根拠地は敵の嚴重な包囲を受け、更に不安定であった。後方と前線の根拠地の労働英雄運動を分析し、それぞれの特徴を明らかにすることで、労働英雄運動の全体像を把握できるであろう。</p> <p>労働英雄運動は陝甘寧から始まったと考えられてきたが、全区規模の労働英雄大会の開催、基層から英雄の序列化、民衆による英雄の選抜、民俗との結合は晋西北が先行して行われ、両根拠地の交流の状況から、晋西北の経験が隣接の陝甘寧に影響を与えた可能性が十分に考えられる。また日本軍の軍事攻撃に直面し、陝甘寧の互助の経験を受け入れて「労働力と武力の結合」という生産と根拠地の防衛を結合する英雄のモデルが創造され、張初元は晋西北の呉満有と評価された。晋西北より不安定な状況にあった太岳では更に軍事闘争を重視し、1941年初めに民兵の葉炎明が殺敵英雄として表彰され、全区で葉炎明式の英雄の育成が呼びかけられた。また、太岳では女性や児童の英雄顕彰も盛んにおこなわれ、全民抗戦の方針が明示された。1943年になると、陝甘寧の経験が伝えられ、太岳でも互助が英雄表彰の中心となった。この他、太岳では抗属（出征兵士の家族）、荣誉軍人（傷痕軍人）といった弱者の模範、革命の模範が表彰され、共和国の模範顕彰運動に継承されたと考えられる。共和国において全面的に展開する女性の農業労働への組織化も、日中戦争期の戦時動員の経験を基礎として定着していったと考えられる。以上から、従来の延安を中心とした中共根拠地の歴史叙述を見直すことの必要性が理解できる。</p> <p>また、延安の工業部門で展開した趙占魁運動は、ソ連のスタハノフ運動と比べて、物質奨励より模範労働者の公正無私な態度、中共に対する忠誠心などの道徳が宣伝されており、共和国の労働模範顕彰にその特徴が継承されていった。その特徴は、先行研究が指摘するよりも早く、すでに趙占魁運動において出現しており、この問題はソ連の経験との比較によって、より明確にすることができる。また、軍事情勢の厳しい前線の各根拠地では、趙占魁運動に比べて技術革新により重点を置く工業労働者の模範顕彰が展開していたことが軍需部門について確認された。</p>	

備考 要旨は、日本語 4,000 字以内又は英語 1,500 ワード以内とする。